チヨウヒデツラ　長英連　通稱九郎左衛門・對馬守。初諱綱連。父敎連の戰歿した時年尙幼かつたから、家臣は之を奉じて潛匿したが、長ずるに及び再び歸つて穴水城に據つた。享祿四年越前の朝倉宗滴は、越中の狩野將監と謀り、本願寺の家宰下間賴秀・賴盛を加賀に挾擊しようとした時、英連も之を援け、七尾なる畠山氏の諸將と共に河北郡に出張し、十一月二日一揆と彌勒曖に戰うたが、敵兵衆多にして越中軍先づ奔潰し、能登の士卒また死する者多く、英連の士加藤將監・宇留地彦八郎等も津幡に於いて國死した。英連後に甥新九郎を養うて子となし、薙髮して長トと號し、穴水に歿した。

チヨウヒデノブ　長秀信　左衛門尉。能登の士。正平六年(觀應二)九月得江石王丸代長野彦三郎家光の軍忠狀に、同年九月十六日秀信は、鹿島郡三引保赤藏寺に楯籠つた吉見三河守氏賴を救援せん爲、大津から打出で、三引保內曲松の要害を取つて、越中の敵桃井刑部大輔直信の軍と軍と戰うたとある。

チヨウフクイン　長福院　羽咋郡氣多神社の社僧。初め當社の社僧は頗る多かつたが、戰國の時悉く退轉し、天正十年前田利家の社領二百石を寄進した頃の寺家は僅かに六ヶ寺であつた。然るに明曆三年前田利常が社領百五十石を加增した頃に至つては、六ヶ寺中二ヶ寺は既に無住となり、長福院・正覺院・藥師院・地藏院を殘すのみであつた。利常氣多神社の社殿を再興した時、自らこの長福院に宿泊したことがある。長福院も亦今既に廢滅してゐる。

チヨウフクジ　長福寺　河北郡若綠に在つて、眞宗東派に屬する。もと道場であつたが、明治十二年六月寺號公稱の許可を得た。

チヨウフクジ　長福寺　鹿島郡七尾に在つて、眞宗東派に屬する。もと近江國に居り、次いで江沼郡大聖寺・鹿島郡國分に移り、又今の所に轉じたといふ。慶長二年七月十二日前田利家の書狀には府中敎信坊と書き、後に鹿島郡同派の觸頭を勤めた。

チヨウフクジ　長福寺　鳳至郡柳田に在つて、眞言宗に屬する。寺記に開基傳法上人、應永三年空鍛法印の再興とする。能登名跡志に、『長福院に本尊行基菩薩作の上品の阿彌陀如來あり。』と見える。この木造上品下生阿彌陀如來座像は体高八九糎で、鎌倉末期乃至室町初期の作と認められ、その他寺藏に紙本著色雅賊觀音像竪九四糎・横三九糎があつて桃山乃至江戸時代初期の作と認められる。

チヨウフヂツラ　長藤連　通稱九郎左衛門。連賢の子。足利義持の頃の人。

チヨウベン　澄辨　白山本宮の長吏。嘉祿二年內戌四月廿八日逝去のことは白山宮莊嚴講中記錄に見える。

チヨウマサツラ　長政連　長朝連の子。通稱三郎・雅樂、後に左衛門尉と改めた。東鑑弘長三年八月十五日鎌倉將軍宗尊親王が鶴岡放生會の供奉人に長雅樂左衛門三郎政連とあるもの是である。

チヨウマサツラ　長政連　通稱九郎左衛門尉。泰連の子。足利義政の命を奉じて但馬に至り、應仁二年三月二十日山名宗全の黨太田垣新兵衛と戰うて敗死したことは、應仁記に見える。

チヨウマサツラ　長正連　通稱九郎左衛門・左近將監・遠江守。國連の子で、宗連の養子となつた。初め鳳至郡荒屋に住し、後に穴水に移り、又但馬の領邑に居て宮方に屬し、阿保肥前入道信禪寺と兵を併せて、仁木彈正少弼・阿良十郎左衛門と戰うた。長氏は祖先信連から正連まで八代、皆穴水の眞言宗來迎寺を菩提所としたが、こゝに至つて禪宗に歸し、同地瑞源寺の大檀那となつたといふ。長氏が穴水を根據の地としたことも、正連の時からであらう。

チヨウミツツラ　長光連　通稱左馬助・九郎左衛門。泰連の子で、兄政連の養子になつた。初め鳳至郡高瀨に住したが、政連の歿したとき、その嫡子秀連尙幼かつたから、家を襲いで穴水に移つた。

チヨウミヨウ　澄明　白山本宮の長吏。澄辰の子で、法印に叙せられ、二十五歲にして遷化した。大永二年七月廿五日澄明が白山寺莊嚴講所新入衆を擧達した狀が遺つてゐる。

チヨウミヨウジ　長明寺　鳳至郡矢波に在つて、眞宗東派に屬する。

チヨウムネツラ　長宗連　通稱九郎左衛門。盛連の次子で、兄國連の養子となり、能登の本領及び深井保を領した。宗連正平十五年(延文五)足利義詮の命を奉じて千劍破城を攻めたが、城主楠木正儀能く防いだから、五月廿三日その城下に戰死した。

チヨウモトツラ　長元連　長連賴の嫡男で、寬永五年二月廿四日生まれた。小字石千代、後左兵衛。寬文七年浦野孫右衛門事件の長氏家中に起つた時、元連は孫右衛門一派の推戴する所となつたを以て、六月その下屋敷に蟄居を命ぜられ、十一年六月十日薙髮して一玄と號し、元祿十年六月十一日七十歲で歿。法號清雲院、鹿島郡田鶴濱東嶺寺に葬られた。

チヨウモリツラ　長盛連　通稱九郎左衛門。有連の子。元弘の時能登の國內大に亂れたので、盛連はこゝに居るに堪へず、遁れて江沼郡塚谷保に住した。建武二年北條氏の餘黨名越太郎時兼、越中に下つて兵を擧げ、野尻・井口・神保・長・富樫・倉光諸氏と兵を併せて上洛を謀つたから、後醍醐天皇は桃井直常を遣はして之を討せしめ賜うた。時に盛連は時兼と共に大聖寺城を陷れて之に據つたが、直常の軍中に上木新兵衛といふ者があつて、素と盛連と親しかつたので、盛連に勸めて桃井氏に屬せしめ、遂に腹背より時兼を攻めて彼を自裁せしめた。是を以て朝議盛連の功を賞し、但馬・薩摩の數邑を賜ひ、盛連は上國に在つて天皇に奉仕した。此の年尊氏叛して西國に退いたが、翌延元元年又東上したから、盛連は脇屋義助等と共に防戰して敵するを得ず、遂に尊氏に屬した。太平記に據れば、正平二年(貞和三)八月細川顯氏の楠正行と戰はんが爲發向した時、盛連は宇都宮三河入道・佐々木六郎判官等と共に、河內に入つて藤井寺の戰に參加し、同年十二月以後再び細川清氏・仁木賴章と共に正行と戰うたとして居る。

チヨウヤ　長屋　石川郡長屋庄に屬する部落。

チヨウヤ　朝屋　三宮古記に朝屋の地名が見える。後世石川郡の長屋村とするものであらう。

チヨウヤシヨウ　蝶屋庄　石川郡に屬する。平家物語嚴永二年俱梨伽羅合戰の條に、『木曾殿やがてそこにて神領をよせられけり。多田